

自然と人をつなぐ

関係設計の入門

自然と人の「あいだ」を見る

Relational value

配布版

野口浩二 著

Reconfiguring Human-
Nature Relationships



配布版について

本書は、書籍『自然と人をつなぐ関係設計の入門 自然と人の「あいだ」を見る』のPDF配布版です。保全に関わる学生や若い世代の方々に役立てていただき、現場での実践や研究が進むことを願い、無償で公開しています。

本PDFは、非営利目的に限り配布いただけます。本PDFの改変・再編集を行った上での再配布はご遠慮ください。営利目的での販売・転載はご遠慮ください。

本書の内容は今後更新される場合があります。修正は主にKindle版に反映されますので、最新の内容はそちらをご確認ください。書籍（紙版）もございますので、内容に関心をお持ちいただけましたらご検討いただけますと幸いです。

Kindle版

<https://www.amazon.co.jp/dp/B0HMH9GG8>

本書に関するお問い合わせ先

電子メール info@interight.co.jp

© 2026 Koji Noguchi / 日本インテライツ株式会社

第1版（PDF配布版）2026年10月10日

免責事項および本書の前提

本書の内容は、著者がこれまでの活動を通じて見聞きし、考察した内容に基づいています。記述の正確性には十分配慮しておりますが、事実関係に誤りがあればご指摘いただけますと幸いです。

本書に記載されている見解は著者個人のものであり、特定の自治体、団体、企業、関係機関の公式見解を示すものではありません。

また、本書で示した考え方や手法は、すべての状況において同様の結果を保証するものではありません。実際の活用にあたっては、それぞれの状況に応じて判断してください。

本書は、特定の正解を提示するものではなく、関係の捉え方や働きかけ方の一つの視点を示すものです。

本書の対象

本書は、「自然と人をつなぐ関係設計」の入門書です。

自然と人をつなぐ関係設計とは、自然そのものだけでなく、自然と人とのあいだにある「関係」も保全の対象として考える自然保全の手法です。

「関係設計って何だろう？」という方や、これから自然保全に関わってみたいと考えている方に、読んでいただければ幸いです。

はじめに

あなたの身近にある自然を、一つ思い浮かべてみてください。家の近くの川や公園、通学路のわきにある草地、田んぼや森林でも構いません。

その場所には、どのような生き物がいるのでしょうか。どのような植物が生えているのでしょうか。普段は気にせず通り過ぎていた場所でも、少し立ち止まって観察してみると、さまざまな発見があると思います。

では、もう一つ、違う質問をしてみます。

その自然は、誰によって、どのように維持されているのでしょうか。

例えば、道路わきの草が短く刈られているのは、なぜでしょうか。誰かが草を刈っているのでしょうか。それとも、草があまり育たない理由があるのでしょうか。

もし誰かが草を刈っているのなら、その人は、何のために草を刈っているのでしょうか。道路を安全に通れるようにするためかもしれません。地域の人たちが、昔から続けてきた活動なのかもしれません。

こうして考えてみると、目の前の自然には、生き物や植物だけでなく、人々の活動や暮らしが関わっていることに気づきます。そして、その活動が続いている背景には、さらに別の人や社会の仕組みがあるかもしれません。

私は、こうした自然と人との間にある、目には見えない「関係」に注目しています。

自然を守るためには、自然の状態を調べることが大切です。しかし、自然の状態だけを見ている、その自然がなぜ現在の状態にあるのか、十分には分からないことがあります。自然と人との関係を調べることで、これまで気づかなかった自然を支える仕組みが見えてくる場合があります。

私は、このような関係を見つけ、理解し、そこに働きかけるための考え方を「自然と人をつなぐ関係設計」と呼んでいます。

本書では、その最初の段階である、自然と人との関係を見つけることを中心に紹介します。自然を観察し、そこに関わる人の活動や、その活動を支えている仕組みに目を向けることで、見えなかった関係を少しずつ明らかにしていきます。

そのために必要なのは、最初から専門的な知識をたくさん持っていることではありません。まず、身近な自然を見て、「なぜだろう」「誰が関わっているのだろう」と疑問を持つことです。

一つの疑問から、別の疑問が生まれることがあります。そして、その疑問を調べていくことで、これまで見えていなかった関係が見つかるかもしれません。

本書は、そんな小さな「？」から始まります。

目次

免責事項および本書の前提-----	3
本書の対象-----	4
はじめに-----	5
第1章 同じ場所を見て、違う世界を見る-----	10
1-1自然と人の関係は、目に見えない-----	10
1-2「人」は一人ではない-----	11
1-3同じ自然でも、人によって見えているものは違う-----	12
1-4「人」が違えば、「関係」も違う-----	13
第2章 自然を守っているのは誰だろう-----	15
2-1同じため池に、二つの関係がある-----	15
2-2自然を守ろうとしなくても、自然を支えている-----	16
NOTE 保全を目的としない活動が、自然を支える-----	17
2-3実際には、もっと多くの関係がある-----	17
2-4「誰が守ろうとしているか」ではなく、関係を見る-----	19
第3章 自然を支えている関係-----	20
3-1複数の関係の中で、どれが重要なのだろう-----	20
3-2関係を一つずつ、頭の中で切ってみる-----	21
3-3自然への影響が大きい関係を見つける-----	23
NOTE 「関係」を見る研究-----	24

3-4重要な関係も、いつまでも続くとは限らない-----	25
3-5目の前の「関係」を一つずつ見つける-----	27
第4章 見えない関係をどう見つけるか-----	28
4-1関係は、直接見ることができない-----	28
4-2まず、自然と人の行動を観察する-----	29
4-3人に聞くと、見えなかった関係が分かる-----	30
4-4資料を調べると、関係の背景が見えてくる-----	31
4-5仮説を立てて、確かめる-----	32
4-6関係を見つけることから始める-----	33
第5章 道路わきの風景は誰がつくったのか-----	35
5-1道路わきの草は、なぜ短いのだろう-----	35
5-2草を刈っているのは誰だろう-----	36
5-3草刈りを支えている関係-----	37
5-4草刈りが続かなくなったら-----	38
5-5身近な自然と風景から、関係を見つける-----	39
第6章 「あいだ」に立ってみる-----	42
6-1自然を見る人と、人の活動を見る人-----	42
6-2どちらか一方だけでは分からないこと-----	43
6-3自然と人の「あいだ」に立つ-----	44
6-4関係が変わるとき、何が見えるのか-----	46
6-5二つの視点をつなぐ-----	47
第7章 自然を守るとは何を守ることか-----	49
7-1自然だけを守ればよいのだろうか-----	49

7-2自然を支えている関係を守る-----	50
7-3関係を見つけることで、問いが変わる-----	51
7-4関係を見つけた、その先に-----	52
7-5自然と人の「あいだ」を見る-----	53
おわりに-----	55
関係設計を学べるカリキュラムへ-----	56
参考文献-----	57
関係設計についての既刊書-----	58
本書について-----	59
著者プロフィール-----	61

第1章

同じ場所を見て、違う世界を見る

1-1 自然と人の関係は、目に見えない

私は自然を守る活動に取り組む中で、自然そのものだけでなく、自然と人との関係にも注目するようになりました。

最初からその関係が見えていたわけではありません。

自然には、さまざまな生き物が暮らしています。人もまた、自然を利用したり、管理したり、観察したりしながら暮らしています。自然と人との間には、何らかの関係があるはずです。

ところが、実際にその関係を見つけようとすると、何を調べればよいのか、分からないことがあります。

そこで、自然と人との関係を、次のように考えてみます。

自然 — 関係 — 人

自然があり、人がいる。その間にある関係を見つければよいと考えます。

このように、自然と人との間に「関係」という言葉を置いてみます。すると、普段は意識していない、自然と人との間にある何かを探そうとしていることが、分かりやすくなります。

しかし、「関係」という言葉を置いただけでは、具体的にどのような関係があるのか、なかなか見えてきません。

1-2 「人」は一人ではない

次に、「人」を具体的に考えてみます。

例えば、私が生き物を観察しているため池があります。このため池には希少な生き物が生息しており、私は自然環境のよい場所だと考えています。

しかし、私とため池との関係だけを考えていても、そこにある関係の全体は見えてきません。

そのため池を訪れる人の中には、私のように生き物を観察する人もいれば、農業のために水を利用する人もいます。近くに住んでいる人や、ため池を管理する人もいるでしょう。

人は私だけでなく、たくさんの方がいます。よく観察してみると、それぞれの人がため池と持っている関係は違います。同じため池でも、人によって関わり方が違うのです。

1-3同じ自然でも、人によって見えているものは違う

私たちは、同じ場所に立っていても、必ずしも同じものを見ているわけではありません。

生き物に詳しい人は、ため池にいるトンボやカエルに目を向けるかもしれません。農家の人は、水の量や水路の状態に注目するかもしれません。

どちらか一方が正しく、もう一方が間違っているわけではありません。それぞれが異なる視点から、同じ自然を見ているのです。

こうした違いは、異なる「レンズ」を通して自然を見ていると考えることができます。

例えば、IPBES（生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム）は、人々が自然の価値をさまざまな視点から捉えていることを示しています。【1】

自然が人の役に立つことを大切にする見方もあれば、自然そのものの存在を大切にする見方もあります。また、自然との関わりの中で生まれる思い出や、地域とのつながりを大切にする見方もあります。

大切なのは、同じ自然を見ている、人によって見えているものが違うということです。

1-4 「人」が違えば、「関係」も違う

最初に考えた自然と人との関係に戻ってみましょう。

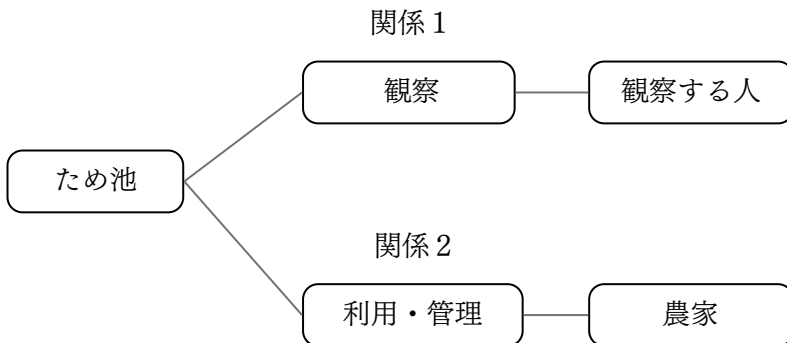
自然 — 関係 — 人

この図では、「人」が一つになっています。

しかし、実際には、一つの自然に対して複数の人が関わっています。そして、それぞれが異なる関係を持っています。

例えば、生き物を観察する人とため池との間にある関係、農家の人とため池との間にある関係のように複数の異なる関係があります。

このように分けて、自然と人の関係を一つずつ調べていきます。



【図1-1】 一つの自然に複数の関係

もう一つ重要なことがあります。

人によって自然の見え方が違うだけでなく、人との関係が違えば、自然に対して行われる活動も違うということです。

生き物を観察する人は、希少な生き物を守るために活動するかもしれません。農家の人は、農業に必要な水を確保するために、ため池を管理しているかもしれません。どちらの活動も、ため池の自然に影響を与える可能性があります。

自然を守ろうとしている人の活動だけが、自然を支えているとは限りません。

では、実際に一つの自然を支えているのは、どのような人たちなのでしょう。次の章では、ため池を例に、そこにある関係の一つずつ見つけていきます。

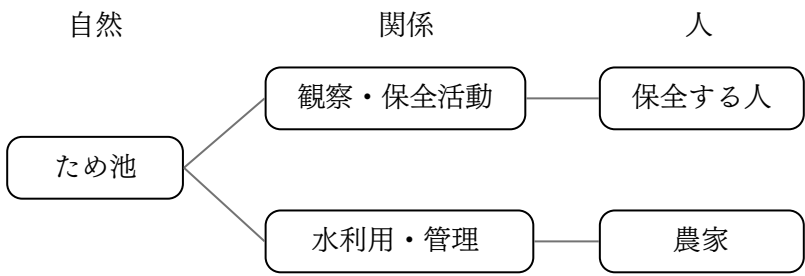
第2章

自然を守っているのは誰だろう

2-1 同じため池に、二つの関係がある

前の章では、同じ自然を見ていても、人によって見えているものが違うことを考えました。自然を守ろうとしている人と、農業を営んでいる人では、同じため池でも、その見方や関わり方が異なります。

ここで、ため池と二人の人との関係を考えてみます。一人は、ため池に生息する生き物を調べ、守ろうとしている人です。もう一人は、農業のためにため池の水を利用し、管理している農家です。この二人とため池との関係を、次のように表してみます。



【図2-1 同じため池に、二つの関係がある】

保全する人との関係には、生き物の観察や調査、保全活動などがあります。一方、農家との関係には、農業用水の利用や、ため池の水位・周辺環境の管理などがあります。同じため池でも、人が違えば関係も違います。そして、どちらの関係も、ため池の自然に影響を与えている可能性があります。

2-2 自然を守ろうとしなくても、自然を支えている

保全する人は、ため池に生息する生き物を守りたいと考えています。生き物の種類を調べたり、ときには保全活動を行ったりします。一方、農家は必ずしも自然を守ることを目的としていません。農作物を育てるために水が必要であり、そのためにため池を管理しています。しかし、ため池の水位を調整したり、周辺の草を刈ったりすることが、そこに生息する生き物の環境を維持している場合があります。

つまり、自然を守ろうと思っていることと、実際に自然を支えていることは、必ずしも同じではありません。

農家は生き物を守るために管理しているわけではありません。それでも、農業のために続けてきた管理が、結果として生き物の生息環境を支えていることがあります。自然と人との関係を考えるときには、その人が何を目的としているだけでなく、実際に自然にどのような影響を与えているのかを見る必要があります。

NOTE

保全を目的としない活動が、自然を守ることもある

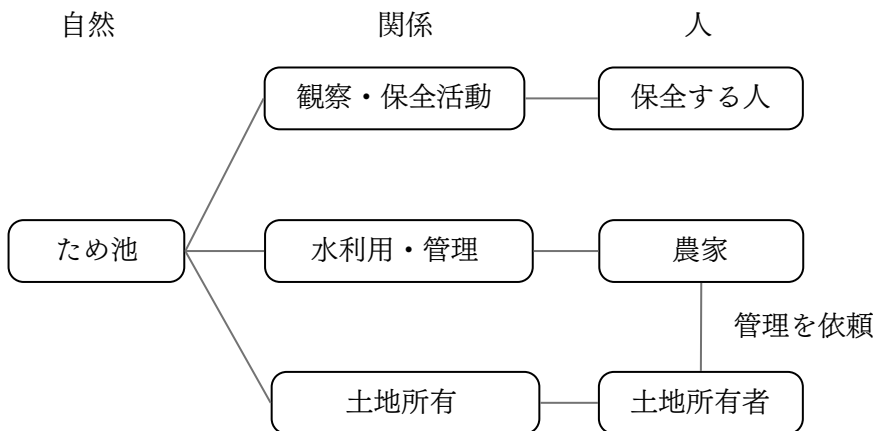
自然保全を主な目的としていない活動が、結果として生物多様性の保全につながることは、既存の研究や制度でも認識されています。例えば、OECM（保護地域以外で生物多様性保全に資する地域）は、自然保全を主な目的として管理されていない場所であっても、生物多様性の長期的な保全に貢献している場合があることを認めています。【2】

関係設計では、このような現象を、自然と人との間にある具体的な関係として取り出して考えます。

2-3 実際には、もっと多くの関係がある

ここまでは、ため池と二人の関係だけを見てきました。しかし、実際のため池には、もっと多くの人が関わっています。例えば、このため池には土地所有者がいて、農家に管理を依頼しているとします。農家は、ため池の下流にある畑で大豆を栽培しており、ため池の水を必要としています。すると、農家がため池を管理している理由は、単に「農家だから」ということではありません。

土地所有者から管理を依頼されていること。大豆を栽培していること。その栽培に水が必要なこと。複数の関係が重なって、ため池の管理が続いているのです。



【図2-2 ため池を取り巻く関係を広げてみる】

最初に示した「自然 — 関係 — 人」という図は、現実の関係が単純であることを意味していません。複雑につながっている関係の中から、一つずつ取り出して考えるための図です。実際には、一つの間係をたどると、その後ろに別の関係が見つかることがあります。

例えば、農家がため池を管理している理由を調べようとするれば、土地所有者との取り決めや、農業用水の利用についても調べる必要が出てくるでしょう。こうして関係をたどることで、最初は見えていなかった人や、その人と自然とのつながりが少しずつ見えてきます。

2-4 「誰が守ろうとしているか」ではなく、 関係を見る

ここまで考えると「自然を守っているのは誰だろう」という問いは、簡単には答えられないことが分かります。

保全する人は、生き物を守ろうとしています。農家は、農業のためにため池を管理しています。土地所有者は、農家に管理を依頼しています。それぞれの目的は異なりますが、その関係が重なることで、現在のため池の自然が維持されている可能性があります。

このとき、誰か一人を「自然を守っている人」と決めるよりも、どのような関係が、この自然を支えているのかと考えた方が、実際の状況を理解しやすくなります。

では、ため池を取り巻く複数の関係の中で、どの関係が自然にとって特に重要なのでしょうか。次の章では、関係を一つつつ取り出し、それがなくなった場合を考えることで、自然を支えている重要な関係を探してみます。

第3章

自然を支えている関係

3-1複数の関係の中で、どれが重要なのだろう

前の章では、一つのため池に、複数の人が関わっていることを考えました。ため池の生き物を観察し、守ろうとしている人がいます。農業のために水を利用し、ため池を管理している農家もいます。そして、ため池の土地所有者が農家に管理を依頼している場合もあります。

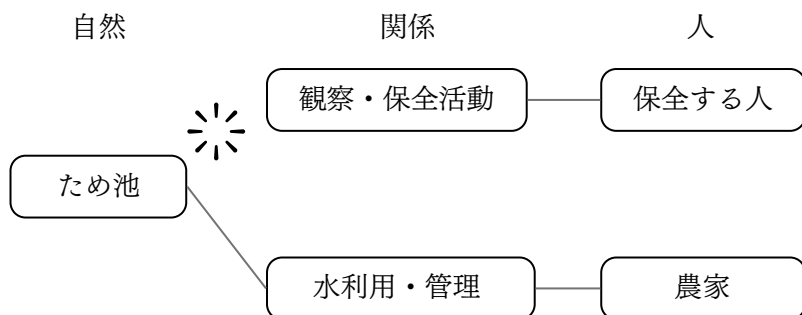
こうして関係を見つけていくと、一つの自然を取り巻く関係は、思っていたよりも複雑であることが分かります。では、見つけた関係は、どれも同じくらい重要なのでしょうか。

自然との関係を持っている人が、必ずしも自然に大きな影響を与えているとは限りません。反対に、自然保全に関心がない人でも、その人の活動が自然の状態を大きく左右していることがあります。関係を見つけることができれば、次は、その関係が自然にどのような影響を与えているのか考えてみましょう。

3-2関係を一つずつ、頭の中で切ってみる

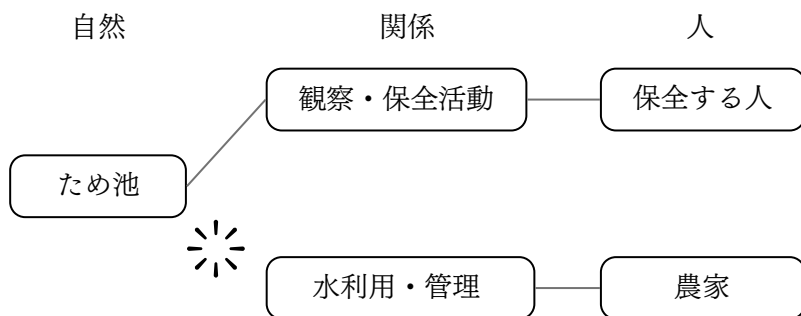
ここで、一つの方法を試してみます。

まず、保全する人との関係がなくなったらどうなるか、想像してみてください。保全する人が、ため池に来なくなったとします。生き物の観察や調査は行われなくなり、自然の変化に気づく人が減るかもしれません。ただし、農家による水利用や管理は、それまでどおり続いているとします。この場合、ため池の自然はどうなるでしょうか。



【図3-1 保全する人との関係がなくなったら】

次に、農家との関係がなくなった場合を考えます。農家がため池の水を利用なくなり、管理も行わなくなったとします。すると、水位の調整や周辺の草刈りが行われなくなるかもしれません。ため池の水位や植生が変わり、そこに生息する生き物にも影響が及ぶ可能性があります。



【図3-2 農家との関係がなくなったら】

この二つを比べると、関係がなくなったときの影響は、同じではないことが分かります。もちろん、実際にどのような変化が起こるかは、ため池の環境や管理の内容によって異なります。保全する人が重要な管理作業を担っていれば、保全する人との関係がなくなる影響も大きいでしょう。

ここで大切なのは、どちらの人が立派か、どちらの活動に価値があるかを比べることではありません。関係が変わったとき、自然の状態がどう変わる可能性があるかを考えることです。

これは、実際に関係をなくして確かめる方法ではありません。頭の中で条件を変えて、影響を予想する方法です。予想が正しいかどうかは、後で調べたり、確かめたりする必要があります。

3-3自然への影響が大きい関係を見つける

関係の一つずつ取り出して考えると、自然への影響が大きい関係と、そうではない関係が見えてきます。関係設計では、次のような関係を「保全上重要な関係」と考えます。

保全上重要な関係：その関係の維持や変化、消失が、自然の状態に大きな影響を与える可能性がある関係

ここでいう「重要」とは、その人が自然を大切に思っているかどうかではありません。自然に与える影響の大きさに注目しています。例えば、農家による水管理が、ため池の生息環境を維持するうえで欠かせない場合、その管理関係は保全上重要な関係と考えられます。

また、土地所有者が誰に管理を依頼するかによって、農家による管理が続くかどうかが変わる場合、土地所有者と農家との関係も、間接的に自然へ大きな影響を与える可能性があります。つまり、自然と直接つながっている関係だけが重要なわけではありません。重要な関係を支えている、別の関係もあるのです。

ただし、関係が重要かどうかは、図を描いただけでは判断できません。どのような管理が行われ、その管理によって自然がどう変わるのかを調べる必要があります。図は、調べるべき関係を見つけるための道具です。

NOTE

「関係」を見る研究

自然と人との関係を考える研究は、さまざまな分野で行われています。例えば、Ostrom（2009）は、自然資源を持続的に利用する仕組みを理解するために、資源だけでなく、利用者や管理の仕組み、それらの相互作用を一緒に捉える枠組みを示しました。【3】

また、Winterら（2018）は、ハワイの伝統的な自然資源利用を題材に、生物と文化的な営みとのつながりに注目し、社会と生態系を支える重要な要素や関係について論じています。【4】

これらの研究に共通するのは、自然を自然だけで理解しようとするのではなく、人々の活動や社会の仕組みとのつながりの中で考えていることです。関係設計も、こうした研究と問題意識を共有しています。本書では、その考え方を身近な自然に当てはめ、具体的な関係の一つずつ見つけることから始めます。

3-4重要な関係も、いつまでも続くとは限らない

ここまで、自然に大きな影響を与える関係について考えてきました。しかし、保全上重要な関係が見つかったとしても、その関係がこれからも続くとは限りません。

例えば、ため池を管理している農家が高齢になり、農業をやめようと考えているとします。農業をやめれば、ため池の水を利用する必要がなくなるかもしれません。その結果、これまで続けてきた水位の調整や草刈りも行われなくなる可能性があります。

このとき、ため池の自然には、まだ目立った変化が起きていないかもしれません。しかし、自然を支えている関係には、すでに変化の予兆が現れています。

土地所有者が亡くなり相続された場合も同様です。所有者が変われば、これまでの管理の取り決めが変わる可能性があります。もちろん、農家が引退しても別の人が管理を引き継ぐ場合がありますし、所有者が変わっても管理が継続されることはあります。そのため、変化の予兆があるからといって、必ず自然が悪くなるわけではありません。

それでも、変化や消失の予兆が現れている場合には、特に注意する必要があります。本書では、このような関係を「消失する可能性のある関係」と呼ぶことにします。

「保全上重要な関係」を太い実線で、「消失する可能性のある関係」を細い破線で、その両方に当てはまる関係を太い破線で表します。

このように考えると、自然の状態を観察するだけでは分からないことが見えてきます。ため池の水がきれいで、生き物もたくさん生息していたとしても、その環境を支えている管理が近い将来なくなるかもしれません。自然の状態に変化が現れる前に、人と自然との関係の変化に気づく手がかりになるのです。



保全上重要な関係（太線）



消失する可能性のある関係（破線）

【図3-3 関係の表現】

3-5目の前の「関係」を一つずつ見つける

ここまで、ため池を例に、自然を取り巻く関係について考えてきました。同じ自然にも、複数の関係があります。その中には、自然の状態に大きな影響を与える関係があります。そして、そうした重要な関係も、社会の変化によって失われたり、別の形に変わったりすることがあります。

このようなことを考えるためには、まず、そこにどのような関係があるのかを知らなければなりません。農家がため池を管理していることを知らなければ、その管理が自然を支えている可能性にも気づけません。土地所有者との取り決めを知らなければ、管理が続いている理由も分かりません。

関係設計では、最初から重要な関係が分かっているわけではありません。自然と人との間に、どのような関係があるのか。まず、それを一つずつ見つけることから始めます。

では、目には見えない関係を、実際にどうやって見つけられようか。次の章では、観察したり、人に話を聞いたり、資料を調べたりしながら、関係を発見していく方法を考えます。

第4章

見えない関係をどう見つけるか

4-1関係は、直接見ることができない

ここまで、自然と人との間にある関係について考えてきました。同じ自然にも複数の関係があり、その中には自然の状態に大きな影響を与える関係があります。また、そうした関係が変化したり、失われたりする予兆が現れている場合もあります。

しかし、関係は目で直接見ることができません。ため池の水や、そこに生息する生き物は観察できます。草を刈っている人や、水門を操作している人の姿を見ることもできます。しかし、なぜその人が管理をしているのか、誰に頼まれているのか、その管理が自然にどのような影響を与えているのかは、見ただけでは分かりません。

関係を見つけるためには、目に見えるものから、目には見えないつながりを考える必要があります。そのために使えるのが、観察すること、人に聞くこと、資料を調べること、そして仮説を立てて確かめることです。

4-2まず、自然と人の行動を観察する

関係を見つける最初の手掛かりは、観察です。

例えば、ため池を訪れたとき、水面や周辺の植物、生き物の様子を観察することができます。同時に、人がその場所にどのように関わっているのかにも目を向けてみます。草が刈られている場所はどこでしょうか。水門は開いているでしょうか。人が歩く道や、作業をした跡はあるでしょうか。

こうしたものは、人の活動によって生まれた可能性があります。草が短く刈られていれば、誰かが草刈りをしているのかもしれませんが。水位が調整されていれば、誰かが水を管理しているのかもしれませんが。

ただし、観察しただけで、その理由まで分かるわけではありません。草が短いのは、人が刈ったからではなく、植物が育ちにくい条件があるからかもしれません。水位の変化も、人による管理ではなく、降雨などの自然条件による可能性があります。

大切なのは、観察したことと、そこから考えたことを区別することです。「草が短い」というのは観察した事実ですが、「誰かが草を刈っている」というのは、まだ仮説です。

観察によって、関係そのものが見えるとは限りません。しかし、どのような関係がありそうかを考える手掛かりを得ることができます。

4-3人に聞くと、見えなかった関係が分かる

観察によって疑問が生まれたら、その場所に関わっている人に話を聞いてみます。

例えば、ため池を管理している農家に、「どのような管理をしていますか」と聞いてみます。すると、水位の調整や草刈りなど、外から見ただけでは分からなかった活動が見えてくるかもしれません。

さらに、「なぜ、その管理をしているのですか」と聞いてみます。農業のために水が必要だから、土地所有者に頼まれているから、昔から続けているからなど、さまざまな理由が考えられます。ここで重要なのは、何をしているかだけでなく、なぜそれをしているのかを聞くことです。

例えば、農家が土地所有者から管理を依頼されていることが分かれば、ため池と農家の関係だけでなく、土地所有者と農家との関係も見えてきます。一つの関係について尋ねることで、それを支えている別の関係が見つかることがあるのです。

もう一つ、聞いておきたいことがあります。それは、「これから、その管理を続けられそうですか」という質問です。

現在は管理が続いていても、農家が高齢になり、引退を考えているかもしれません。土地所有者が変わる予定があるかもしれません。こうした話を聞くことで、現在の関係だけでなく、これから関係が変化する可能性についても手掛かりが得られます。

もちろん、一人の話だけで全てが分かるとは限りません。管理を依頼している人と、実際に作業している人とは、事情の理解が異なることもあります。必要に応じて、複数の人に話を聞くことも大切です。

4-4資料を調べると、関係の背景が見えてくる

人に聞くだけでなく、資料を調べることも、関係を見つける方法の一つです。

例えば、ため池について調べるなら、土地の所有関係や管理の取り決め、過去の利用状況などが手掛かりになります。地域の資料や行政の記録、古い地図などから、現在のため池がどのように利用され、管理されてきたのかを知ることができる場合があります。

現在の関係が、昔から同じ形で続いているとは限りません。かつては多くの農家が利用していたため池を、現在は一人の農家だけが管理しているかもしれません。以前は農業用水として使われていた場所が、今ではほとんど利用されていない場合もあります。

このような変化を調べることで、現在の関係がどのように生まれ、どのように変わってきたのかが見えてきます。

ただし、資料に書かれていることと、実際に行われていることが同じとは限りません。

土地の所有者と、実際に管理している人が異なることもあります。資料で分かったことは、現地での観察や聞き取りと照らし合わせて考える必要があります。

4-5 仮説を立てて、確かめる

観察したり、人に聞いたり、資料を調べたりすると、自然と人との関係について、少しずつ情報が集まってきます。

例えば、「農家による水位の調整が、ため池の生き物の生息環境を維持しているのではないか」という考えが浮かぶかもしれません。

これが仮説です。

仮説を立てることは、関係を見つけるうえで重要な作業です。目に見える事実だけを集めても、その事実がどのようにつながっているのかは分かりません。そこで、集めた情報をもとに、関係のあり方を予想してみます。

ただし、仮説は、まだ確かめられていない考えです。例えば、農家が管理しているため池に多くの生き物がいたとしても、それだけで、農家の管理によって生き物が増えたとは言えません。もともとの地形や水質、周辺的环境など、別の理由があるかもしれないからです。

仮説を確かめるには、管理の内容を詳しく調べたり、過去の状態と比較したり、管理方法が異なる場所と比べたりする方法が考えられます。

必ずしも一度の調査で答えが出るわけではありません。新しい情報が見つければ、仮説を修正することも必要です。

また、第3章で考えたように、「この関係がなくなったら、自然はどうなるだろう」と想像することも、仮説を立てる方法の一つです。ただし、頭の中で予想したことと、実際に確かめられたことは区別しておかなければなりません。

4-6 関係を見つけることから始める

ここまで、関係を見つけるための方法を紹介してきました。観察すること、人に聞くこと、資料を調べること、そして仮説を立てて確かめることです。

これらは、必ずしも決まった順番で行う必要はありません。観察から始めることもあれば、人の話を聞いたことがきっかけで、現地を調べることもあります。資料を読んで疑問が生まれ、再び現地を訪れることもあるでしょう。

大切なのは、一度調べて終わりにするのではなく、分かったことをもとに、さらに関係をたどっていくことです。ため池と農家の関係を調べると、土地所有者との関係が見つかるかもしれません。管理の理由を調べると、農業や地域の暮らしとのつながりが見えてくるかもしれません。

また、関係が見つかったとしても、その関係が自然にとって重要なのか、これからも続くのかは、別に考える必要があります。関係の存在、自然への影響、将来の変化の可能性を、一つずつ確かめていくことが大切です。

自然と人との関係は、最初から全てが見えているわけではありません。目の前にある自然を観察し、そこに関わる人の行動や理由を調べることで、少しずつ見えてきます。

次の章では、ため池から離れ、道路わきの草刈りを例に、私たちの身近な風景をつくっている関係を考えてみます。

第5章

道路わきの風景は誰がつくったのか

5-1道路わきの草は、なぜ短いのだろう

私たちが普段通っている道路のわきには、さまざまな植物が生えています。背の高い草が茂っている場所もあれば、短い草が広がっている場所もあります。同じ道路でも、場所によって風景は異なります。

私は以前、スミレについて調べていたことがあります。スミレは背の低い植物なので、背の高い草木が茂った場所では見つけにくくなります。一方、道路わきには草の短い場所があり、そうした場所でスミレをよく見つけました。

なぜ道路わきには、草の短い場所があるのでしょうか。

草が自然に短く育っている可能性もありますが、誰かが草刈りをしているのかもしれませんが。もし人が草を刈っているのなら、誰が、何のために刈っているのでしょうか。

このように考えると、何気なく見ていた道路わきの風景にも、自然と人との関係が隠れていることに気づきます。



【写真 背の低い植物が茂る道路わき】

5-2草を刈っているのは誰だろう

道路わきの草刈りには、さまざまな人が関わっています。道路を管理する行政が業者に委託している場合もあれば、地域の住民が草刈りを行っている場合もあります。

例えば、町が管理する道路で、地域の人たちが草刈りをしている場合を考えてみましょう。

地域の人たちは、道路を安全に通行できるようにするため、見通しを確保したり、道路にはみ出した草を刈ったりしています。草刈りの目的は、必ずしも自然を守ることはありません。地域の生活環境を維持するために行われている活動です。

しかし、草刈りによって植物の高さや種類が変わることがあります。草が刈られることで、背の高い植物が優占することを抑えられ、背の低い植物が生育できる場合もあります。一方で、草刈りの時期や頻度によっては、植物が花を咲かせたり、種子をつくったりする前に刈られてしまうこともあります。

つまり、地域の人たちが行っている草刈りは、道路の維持管理であると同時に、道路わきの自然にも影響を与えているのです。ここでも、自然を守ろうとしているかどうかと、実際に自然に影響を与えているかどうかは、別の問題です。

5-3草刈りを支えている関係

地域の人たちは、なぜ草刈りをしているのでしょうか。

昔から地域の活動として続いているからかもしれません。道路を安全に利用するために必要だからかもしれません。また、行政から依頼を受けている場合もあります。

例えば、町が道路の管理を担い、地域の団体が草刈りを行い、その活動を町が補助金などで支援する仕組みがあります。

この場合、道路わきの植物と地域の人たちとの関係だけでなく、町と地域の団体との間にも関係があります。町が活動を支援し、地域の人たちが実際に草を刈ることで、道路わきの風景が維持されています。

ここで、自然と人との関係をもう一度考えてみます。

道路わきの植物と、草刈りをする地域の人たちは、直接つながっています。しかし、その草刈りを支えているのは、町と地域の団体との取り決めや、活動を続けるための仕組みかもしれません。

このように、一つの関係をたどると、その関係を支えている別の関係が見えてきます。

最初は、道路わきの草が短く、そこにスミレが咲いているという風景だけが見えていました。しかし、誰が草を刈っているのか、なぜ草刈りを続けているのかと問いを重ねていくと、その背景に行政や地域の仕組みとのつながりがある可能性にも気づきます。

こうして見つけた関係が実際にあるのかどうかは、人に話を聞いたり、資料を調べたりして確かめる必要があります。

5-4草刈りが続かなくなったら

ここで、第3章と同じように、関係が変わった場合を考えてみます。

例えば、草刈りを行っている地域の人たちが高齢になり、作業を続けることが難しくなったとします。若い世代の参加も少なく、これまでと同じ方法では草刈りを続けられなくなるかもしれません。

このとき、道路わきの植物には、まだ目立った変化が起きていないかもしれません。これまでどおり草が刈られ、同じような風景が続いていることもあります。しかし、草刈りを支えている人と人との関係には変化の予兆が現れています。

もし地域の人たちが草刈りをやめれば、町が別の方法で管理することになるかもしれません。例えば、業者に委託する方法も考えられます。

ただし、管理する人が変わっても、草刈りの時期や頻度、刈る範囲まで同じになるとは限りません。管理方法が変われば、道路わきの植物にも変化が生じる可能性があります。

反対に、新しい管理方法によって、植物の生育に適した環境が生まれる場合もあるでしょう。関係が変わることは、必ずしも自然に悪い影響を与えるとは限りません。

重要なのは、現在の自然と風景がどのような関係によって維持されているのか、そして、その関係が変わったときに何が起こる可能性があるのかを考えることです。

5-5身近な自然と風景から、関係を見つける

道路わきの草刈りは、特別な自然保護活動ではありません。私たちの暮らしの中で、ごく普通に行われている活動です。

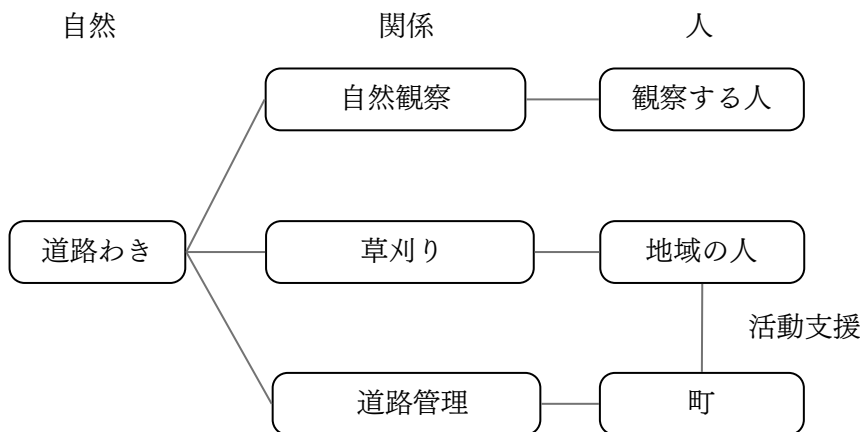
道路わきの植物に目を向け、そこから草刈りをする人を見つけ、さらにその活動を支えている仕組みを調べていくと、自然と人との間にあるさまざまな関係が見えてきます。

そして、その関係の中には、自然の状態に大きな影響を与えるものがあるかもしれません。また、今は続いていても、将来は変わってしまう関係があるかもしれません。

こうした関係は、道路わきだけにあるわけではありません。公園の草刈り、農地の管理、河川の清掃、森林の利用など、私たちの身近な場所にも、同じような関係があります。

自然と人との関係を見つけるために、特別な場所へ行く必要はありません。普段見慣れた自然と風景でも、「誰が、何のために、この状態をつくっているのだろう」と問いかけることで、これまで見ていなかった関係を発見できることがあります。

次の章では、こうした関係を見つけるときに、自然を見る人と、人々の活動や社会の仕組みを見る人との間に立って考えることについて紹介します。



【図5-1 道路わきを取り巻く関係の例】

第6章

「あいだ」に立ってみる

6-1自然を見る人と、人の活動を見る人

前の章では、道路わきの草刈りを例に、身近な自然と風景がどのような関係によってつくられているのかを考えました。道路わきの植物と、草刈りをする地域の人たちとの間には関係があります。そして、その草刈りを支えているのは、行政と地域の団体との取り決めや、活動を続けるための仕組みかもしれません。

ここで、同じ道路わきの自然や風景を、異なる立場の人が見た場合を考えてみましょう。

例えば、植物を調べている人は、道路わきにどのような植物が生えているのかに注目します。草刈りによって植物の種類や生育環境がどう変わるのか、いつ草を刈れば植物にどのような影響があるのか、といったことを考えるでしょう。

一方、道路を管理する行政の担当者は、別のことに注目するかもしれません。道路を安全に利用できる状態に保つためには、いつ、誰が草を刈るのか。作業に必要な予算はあるのか。これからも管理を続けられるのか。そうしたことが重要になります。

草刈りをしている人も、また違う見方をしているかもしれません。作業に参加できる人が何人いるのか、草刈り機を使える人がいるのか、暑い時期の作業をどうするのか。実際に活動が続ける立場だからこそ、気づくことがあります。

このように、同じ場所を見ていても、立場によって注目するものは異なります。それぞれの人が、自分の経験や役割に応じた視点から、その場所を理解しているのです。

6-2どちらか一方だけでは分からないこと

自然を調べることは、自然保全にとって大切です。どのような生き物が生息しているのか、どのような環境が必要なのか、人の活動によってどのような影響があるのかを知らなければ、自然を守る方法を考えることは難しいでしょう。

しかし、自然の状態を調べるだけでは、その環境がなぜ維持されているのか、十分には分からないことがあります。

例えば、道路わきに背の低い植物が生育している場所があったとします。その植物が、定期的な草刈りによって維持される環境に生育していることが分かったとしても、誰が草を刈っているのか、なぜ草刈りが続いているのかは、それだけでは分かりません。

反対に、地域の活動や行政の仕組みを詳しく調べても、その草刈りが植物にどのような影響を与えているのかは分かりません。地域の人たちが長年続けてきた活動であっても、自然にとってどのような意味があるのかは、別に調べる必要があります。

つまり、自然の状態と、人々の活動や社会の仕組みは、それぞれを調べるだけでは十分ではありません。両方を調べ、それらがどのようにつながっているのかを考えることで、初めて分かることがあります。

6-3自然と人の「あいだ」に立つ

本書では、自然と人との間にある関係を、「自然 — 関係 — 人」という図で表してきました。

この図で注目したいのは、自然でも人でもなく、その間にある「関係」です。道路わきの植物と地域の人たちとの間には草刈りという関係があり、草刈りは生育環境を変化させます。地域の人たちの側から見れば、道路を安全に利用するための作業であり、地域の暮らしを維持するための活動です。

同じ草刈りでも、自然の側から見る場合と、人の側から見る場合では、その意味が異なります。しかし、実際には別々の出来事が起きているわけではありません。一つの草刈りという活動を、それぞれ異なる視点から見ているのです。

そこで、どちらか一方の視点だけで考えるのではなく、自然と人の「あいだ」に立ってみます。

そこにはどんな植物が生えているのか、人の活動が自然にどのような影響を与えているのか、そして人はなぜその活動を行っているのか。一緒に考えてみるのです。

自然と人の両方に目を向け、その間にある関係を理解しようとすることです。



【図6-1 間に立つイメージ】

6-4関係が変わるとき、何が見えるのか

自然と人の「あいだ」に立つことで、現在の自然がどのような関係によって支えられているのかを考えることができます。さらに、その関係がこれからどう変わるのかについても、手掛かりを得られることがあります。

例えば、道路わきの草刈りを行っている地域の人たちが高齢になり、作業を続けることが難しくなっているとします。行政や地域活動の立場から見れば、これは草刈りの担い手が不足しているという問題です。

一方、その草刈りによって特定の植物の生育環境が維持されているとすれば、自然保全の立場からも重要な問題になります。

ここで、二つの視点を重ねて考えてみます。

草刈りをする人が減っていることは、地域活動の問題であると同時に、自然を支える関係が変化する予兆かもしれません。今は道路わきの植物に目立った変化がなくても、草刈りが続けられなくなれば、将来、生育環境が変わる可能性があります。

第3章では、自然の状態に大きな影響を与える可能性がある関係を「保全上重要な関係」と呼びました。そして、関係に変化や消失の予兆が現れている場合を「消失する可能性のある関係」と考えました。

自然だけを観察していると、植物の状態が変わるまで、この問題に気づかないかもしれません。しかし、草刈りをしている人たちの話を聞けば、自然が変化する前に、関係の変化に気づくことができる可能性があります。

もちろん、草刈りの担い手が変わったとしても、同じ管理が続く場合があります。また、管理方法が変わることで、自然にとって望ましい変化が起こることもあります。関係の変化が、必ず自然の悪化につながるわけではありません。

それでも、自然と社会の両方を見ることで、自然の状態だけを調べていては見つけにくい変化の予兆を捉えられる場合があるのです。

6-5二つの視点をつなぐ

自然と人の「あいだ」に立つことは、異なる立場の人たちが持っている情報を、関係という視点からつなぎ合わせることであります。

植物を調べる人は、草刈りが自然に与える影響について知っているかもしれません。地域の人たちは、草刈りを続けてきた理由や、作業を続けるうえでの難しさを知っているかもしれません。行政の担当者は、道路の管理制度や予算について知っているかもしれません。

それぞれが持っている情報は異なります。しかし、それらを一つの関係として考えることで、現在の風景がどのように維持されているのか、どこに変化の可能性があるのかを、より詳しく理解できるようになります。

ここで重要なのは、全員が同じ考え方になる必要はないということです。植物を守りたい人と、道路を安全に利用したい人とでは、目的が異なります。それでも、同じ草刈りという活動について、それぞれの立場から情報を持ち寄ることはできます。

関係を見ることは、異なる立場の人たちの考え方を一つにそろえることではありません。それぞれの違いを残したまま、自然と人との間で何が起きているのかを理解しようとすることです。

本書では、自然と人との関係を見つけることから始め、その関係が自然に与える影響や、関係が変化する可能性について考えてきました。自然と人の「あいだ」に立つことで、自然だけを見ていても、人の活動だけを見ていても気づけなかったことが見えてきます。

では、こうして自然を支えている関係が見つかったとき、私たちは何を守ろうとしているのでしょうか。自然そのものを守ることと、自然を支えている関係を守ることは、どのようにつながっているのでしょうか。

最後の章では、「自然を守るとは何を守ることなのか」という問いについて、もう一度考えてみます。

第7章

自然を守るとは何を守ることか

7-1 自然だけを守ればよいのだろうか

ここまで、自然と人との間にある関係について考えてきました。同じ自然にも複数の関係があり、その中には自然の状態に大きな影響を与える関係があります。また、そうした関係が変化したり、失われたりすることで、自然の状態も変わる可能性があります。

では、自然を守るとは、何を守ることなのでしょうか。

例えば、ため池に希少な生き物が生息しているとします。その生き物を守るためには、生息環境を維持する必要があるでしょう。水質や水位、周辺の植生など、生き物が暮らすための条件を調べ、必要なら保全することが考えられます。

しかし、その生息環境が農家による水管理によって維持されているとしたら、どうでしょうか。ため池の自然だけを調べていても、農家が管理をやめれば、環境が変わってしまうかもしれません。

自然を守るためには、自然の状態だけでなく、その状態を支えている人の活動や、活動を続けるための仕組みにも目を向ける必要があるのです。

7-2自然を支えている関係を守る

第3章では、関係が変化したり、失われたりすることで、自然の状態に大きな影響を与える可能性がある関係を「保全上重要な関係」と呼びました。

ため池の水位を調整する農家との関係や、道路わきの草刈りを行う地域の人たちとの関係は、その例になるかもしれません。ただし、実際に重要な関係であるかどうかは、自然への影響を調べて確かめる必要があります。

もし、そのような関係が自然の生息環境を支えていることが分かったなら、自然を守るためには、その関係がこれからも続くことが重要になる場合があります。

例えば、農家がため池の管理を続けられなくなるのであれば、誰が管理を引き継ぐのかという問題が生じます。道路わきの草刈りをする人がいなくなるのであれば、管理をどのように続けるのかを考える必要があるかもしれません。

ただし、関係を守ることは、現在の人や活動、制度を、そのまま残すこととは限りません。管理する人が変わっても、自然に必要な管理が続く場合があります。反対に、これまでの管理を続けることが、必ずしも自然にとって望ましいとは限りません。

大切なのは、現在の関係を変えずに残すことではなく、自然を支えている働きが何なのかを理解することです。その働きが維持されるのであれば、関係の形は変わってもよい場合があります。

7-3関係を見つけることで、問いが変わる

自然と人との関係を考えると、自然保全についての問いも変わってきます。

例えば、ため池の生き物を守りたいと考えたとき、最初は「どうすれば、この生き物を守れるのだろうか」と考えるかもしれません。そこで生き物の生態や生息環境を調べることは、もちろん重要です。

しかし、ため池の環境が農家の水管理によって支えられていると分かれば、別の問いが生まれます。「なぜ農家は、このため池を管理しているのだろうか」「その管理は、これからも続くのだろうか」「管理が変わると、生き物の生息環境はどうなるのだろうか」といった問いです。

これらは、生き物そのものについての問いではありません。生き物を取り巻く人の活動や、その活動を支える関係についての問いです。

道路わきの草刈りでも同じです。植物の生育環境を守ろうとすると、草刈りの時期や頻度だけでなく、誰が草を刈っているのか、なぜ続けているのか、今後も続けられるのかを考える必要があるかもしれません。

自然と人との関係を見つけることで、これまで自然の問題だと思っていたことの中に、人々の暮らしや社会の仕組みに関わる問題が含まれていることに気づきます。

7-4関係を見つけた、その先に

本書では、自然と人との間にある関係を見つけることを中心に考えてきました。自然を観察し、人に話を聞き、資料を調べ、仮説を立てて確かめることで、目には見えない関係を少しずつ明らかにしていきます。

しかし、関係を見つけることは、自然を守るための一つの段階にすぎません。

例えば、ため池の管理が続かなくなる可能性があると分かったとします。そこから先は、どのようにすれば必要な管理を続けられるのか、誰と話し合えばよいのか、どのような方法が考えられるのかという、新しい問いが生まれます。

そのとき、働きかける相手は、必ずしも自然と直接関わっている人とは限りません。農家による管理を続けたい場合でも、土地所有者との取り決めや、地域の管理の仕組みが重要になるかもしれません。

関係設計では、このように、関係を変えたり、新しい関係を生み出したりするために、どこから働きかけるかという点を「働きかけの起点」として考えます。

ただし、どこが起点になるのかは、関係を見つけただけでは決まりません。何を実現したいのか、どの関係が変わる必要があるのか、どのような働きかけが可能なのかを、さらに考える必要があります。

本書では、そこまで詳しく扱いません。まずは、自然と人との間にどのような関係があるのかを見つけ、その関係が自然にどのような影響を与えているのかを考えることを目標としています。

7-5自然と人の「あいだ」を見る

最初の章では、同じ自然を見ていても、人によって見えるものが異なることを考えました。自然を守ろうとしている人と、農業を営んでいる人とでは、同じため池でも、その意味や関わり方が違います。

しかし、その違いは、どちらか一方が正しく、もう一方が間違っているということではありません。それぞれの人が、自然と異なる関係を持っているということです。

そして、そうした関係の中には、自然を支えているものがあります。自然を守ることを目的としていない活動であっても、結果として自然の状態を維持している場合があります。

自然を守るとは、自然そのものを調べ、必要な状態を維持することだけではありません。その自然がどのような人の活動や社会の仕組みによって支えられているのかを理解し、必要に応じて、それらの関係が続くことや変わることにも目を向けることです。

私たちの身の回りには、まだ気づいていない関係がたくさんあります。ため池や道路わきだけでなく、田畑、森林、川、公園など、普段見慣れた場所にも、自然と人との関係が存在しています。

その関係は、目で直接見ることはできません。しかし、観察し、話を聞き、調べ、考えることで、少しずつ見つけることができます。

自然を見るとき、その自然にどのような人が関わっているのかを考えてみてください。そして、人々の活動を見るとき、その活動が自然にどのような影響を与えているのかを考えてみてください。

自然と人の「あいだ」に目を向けることで、これまでとは違う世界が見えてくるかもしれません。

おわりに

本書では、自然と人との間にある、目には見えない「関係」を見つける方法について紹介してきました。

関係設計はまだ完成した理論ではありません。実際の現場で起きていることを観察し、そこにどのような関係があるのかを考え、仮説を立てて確かめながら、少しずつ形にしている考え方です。重要だと思っていた関係が、調べてみるとそうではないこともあるでしょう。反対に、何気ない人の活動が、自然を支えていることに気づく場合もあると思います。

本書では、関係を見つけることを中心に紹介しました。しかし、関係を見つけた後には、その関係にどのように働きかけるのかという、次の問いが生まれます。それについては、別の機会に紹介したいと思っています。

関係設計を学ぶために、特別な自然環境へ行く必要はありません。身近な田畑や森林、川や公園、道路わきの草地にも、自然と人との関係があります。普段見慣れた風景に、少し違う視点から目を向けてみてください。

あなたの身近な自然は、どのような人との関係によって支えられているのでしょうか。

関係設計を学べるカリキュラムへ

本書では、自然と人との間にある関係を見つけるための基本的な考え方を紹介しました。しかし、実際に関係を見つけるためには、身近な自然を観察し、人に話を聞き、仮説を立てて確かめる経験が必要です。

関係設計では、こうした考え方や方法を実際に体験しながら学べるカリキュラムづくりにも取り組んでいます。

例えば、一つの自然を異なる視点から観察することや、自然と人との関係を図に表すこと、見つけた関係が自然にどのような影響を与えているのかを考えることなどです。こうした学習を通じて、普段は気づかない関係を発見する力を育てることを目指しています。

関係設計についてさらに学びたい方や、学校での探究学習、地域活動などに取り入れたい方は、里山生物多様性プロジェクトのウェブサイトをご覧ください。

一般社団法人 里山生物多様性プロジェクト

https://interight.co.jp/satoyama_org/

参考文献

【1】IPBES (2022). Methodological Assessment Report on the Diverse Values and Valuation of Nature of the Intergovernmental Science-Policy Platform on Biodiversity and Ecosystem Services. Balvanera, P., Pascual, U., Christie, M., Baptiste, B., & González-Jiménez, D. (eds.). IPBES Secretariat, Bonn, Germany.

【2】IUCN-WCPA. (2024). Guidance on other effective area-based conservation measures (OECMs). Gland, Switzerland: IUCN.

DOI: <https://doi.org/10.2305/LAAW4624>

【3】Ostrom, E. (2009). “A General Framework for Analyzing Sustainability of Social-Ecological Systems.” *Science*, 325(5939), 419–422.

【4】Winter, K. B., Lincoln, N. K., & Berkes, F. (2018). “The Social-Ecological Keystone Concept: A Quantifiable Metaphor for Understanding the Structure, Function, and Resilience of a Biocultural System.” *Sustainability*, 10(9), 3294.

関係設計についての既刊書

本書で紹介した「自然と人をつなぐ関係設計」については、これまでに次の3冊を執筆しています。

『自然と人をつなぐ仕事』では、自然と人との関係に注目するようになった経緯や、関係設計の基本的な考え方を紹介しています。『自然と人の関係設計 数式で捉える価値の現れ方』では、自然の価値が人との関係の中でどのように現れるのかを、数式で表現することを試んでいます。また、『違ったまま、つながる』では、異なる立場や価値観を持つ人たちが、自然を通じて協働する可能性について考えています。

本書を読んで関係設計に関心を持たれた方は、あわせてご覧いただければ幸いです。

- ・野口浩二（2026）『自然と人をつなぐ仕事』日本インテライツ株式会社
- ・野口浩二（2026）『自然と人の関係設計 数式で捉える価値の現れ方』日本インテライツ株式会社
- ・野口浩二（2026）『違ったまま、つながる 自然と人をつなぐ関係設計』日本インテライツ株式会社

本書の内容は、著者の見聞および考察に基づくものであり、その正確性および結果を保証するものではありません。本書に記載された見解は著者個人のものであり、特定の自治体、団体、企業、関係機関の公式見解を示すものではありません。本書の内容を利用したことによって生じたいかなる結果についても、著者は責任を負いかねます。あらかじめご了承ください。

配布版

本PDFは、非営利目的に限り配布いただけます。本PDFの改変・再編集を行った上での再配布はご遠慮ください。営利目的での販売・転載はご遠慮ください。

本書の内容は今後更新される場合があります。修正は主にKindle版に反映されますので、最新の内容はそちらをご確認ください。書籍（紙版）もございますので、内容に関心をお持ちいただけましたらご検討いただけますと幸いです。

自然と人をつなぐ関係設計の入門 自然と人の「あいだ」を見る

初版 2026年10月10日

著者 野口浩二

発行 日本インタラइट株式会社

ホームページ <https://interight.co.jp/top/>

本書に関するお問い合わせ先

電子メール info@interight.co.jp

© 2026 Koji Noguchi / 日本インタラइट株式会社

著者プロフィール

野口 浩二

一般社団法人里山生物多様性プロジェクト 代表理事。

鳥取県南部町出身。富山大学理学部物理学科卒業、名古屋大学大学院修了（理学修士）。製造業のエンジニアを経て、地元に戻り活動を開始。2020年に法人を設立し、生物多様性の保全と利活用に取り組んでいる

配布版

自然と人をつなぐ関係設計の入門 自然と人の「あいだ」を見る

日本インタラッツ株式会社

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）